高知県の地学教育雑感

旧幹事　高知大・理学部　田　代　正　之

生れ故郷の熊本をはなれ、早2年半たちました。ここ南国は土佐の国、日本地質学の発祥地佐川町に、ささやかな新居をかまえました。裏山には有名なジュラ紀の鳥巣層群があります。北に一山越えれば、化石産地で有名な蔵宝院があります。かって著名な先達の方々が、付近の山野を濶歩された所かと思うと感慨深いものがあります。さすがに地質国高知には、それを忍ばせる施設があちこちにあります。例えば、地方の町の文化会館（佐川町、中村市、天狗高原など）には、岩石、化石展示場があり、高知市五台山には故平田茂留先生の膨大な標本を収めた県立化石博物館があり、桂浜には現棲や化石の貝を展示した立派な貝類博物館があります。また、県指定の地質学関係の天然記念物も数多くみられます。熊本の半分程の人口の高知県ですが、熊本とは比較にならない程、この様な施設は造られていますし、最近流行の町史、村史の編纂と平行して、さらに地方の小博物館は増えていく傾向にあるようです。この様に書きますと、高知県の地学教育はさぞかし立派な成果を上げているかの様に思われるかも知れませんが、その実態は実に寒々としたあわれな状態です。普通高校で、地学を実施している所は皆無に近く、小・中学生の地学をテーマにした研究発表も数える程しかありません。もちろん大変熱心な方々も少なくはありません。その勉強ぶりは、牧野富太郎や寺田寅彦をあげるまでもなく、土佐人独得のすごさがあります。その一途さが、ある意味ではガンになっていて、横のつながりを欠く結果になっているともいえます。また、もう1つの大きな地学教育不振の原因は、地方大学と地域の連がりが大変少ないという事かと思います。高知大学学生総数のうち最近はようやく30%近く地元高知出身の学生になってきました（入試制度の変化によるものでしょうか）が、つい2年前までは、10～20%位で、地学教室（理学部）にいたっては80名中3人という有様でした。また、地方教師の教育機関である教育学部でも30%未満という状態なのです。したがって、高知大出身の地学教師が高知県下へ巣立つ数は、数年に1人ということになっているのが現状です。

この様な状態を打破するために、高知県化石研究会がある人の手によって発足すれば、土佐地質同好会、団研などと、いくつかの会が次々と出来たようです。しかし、会誌第1号が出たままのもの、すでに有名無実になっているものが大部分です。結局、地学教育の不振を憂う人が何人かいれば、その人達が手を取り合うという形でなく、各々が、我こそはその代表者だと名のりをあげ、それを支えなければならない教育現場の教師は、高知県以外で教育を受けた郷土の地質を知らないUターン教師の寄合い所帯といった塩梅では、うまくいくはずはありません。

このような高知県の地学教育の実態を眺めていると、今更ながら、熊本地学会のはたしてきた、また、今後もはたすであろう役割の重要さが実感として、ひしひしと感じられずにはいられません。仏造って魂入れずを地でいく高知の地学教育と、笛吹けど躍らずの熊本県の地学教育の体制側の対称的な姿勢がうかがえて面白いのですが、唯、面白いと笑ってもおられません。そのうち、熊本地学会に負けない様な組織を、高知県でも造らねばならないと思っています。熊本地学会の益々の発展を高知の空より願っております。